

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 15 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370272

研究課題名(和文) Romantic Connections: Locating European Romanticism in a Global Context

研究課題名(英文) Romantic Connections: Locating European Romanticism in a Global Context

研究代表者

S・H Clark (Clark, Stephen Hedley)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・客員教授

研究者番号：40335469

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：2014年6月に主催した国際学会「ロマンティック・コネクションズ」(東京大学)では、東洋と西洋あるいはアジア諸国間の混交、文学・文化におけるアジア表象の変容など、従来とは異なる空間・時間軸からロマン主義文学を捉え直し、他のアジア・オセアニア諸国の学者との交流を行った。本学会は2015年6月開催の「イザベラ・バードと女性の紀行文学における詩学」(東京大学)、2017年11月開催予定の「パシフィック・ゲートウェイ」に引き継がれ、これらのシンポジウムではアジアにおけるロマン主義文学の受容史を、文化的邂逅と世界史というより大きな文脈に位置づけ、また世界共通語としての英語のあり方を再定義する。

研究成果の概要(英文)：The conference, Romantic Connections, held at the University of Tokyo (June 13-15 2014), attempted to resituate Romanticism according to alternative geographical and temporal axes, emphasising Asian contexts, convergences and creative transformations. It sought to showcase recent scholarship by Japanese academics and promote dialogue and collaborative exchange with other major Asian and Pacific Rim universities. Romantic Connections provided a precedent for the 2016 symposium, Isabella Bird and the Poetics of Female Travel-Writing, and the forthcoming Pacific Gateways conference in 2017. These events similarly combine attention to reception history in Japanese and Asian contexts, within a broader framework of cultural encounter and the perspective of a global history. There is also recurrent consideration of how English has been increasingly redefined as a world language, and how these recent debates may be relevant to both study of earlier periods and educational practice.

研究分野：英米・英語圏文学

キーワード：Romanticism English literature world literature reception studies

## 1. 研究開始当初の背景

元々William Blakeの詩を専門とし、ケンブリッジ大学では同詩人を扱った博士論文を執筆した(題目: 'William Blake and the Poetry of Sensibility')。その後、この博士論文を発展させ、多数の雑誌論文等を発表した。例としては、David Worrall 共編 *Historicising Blake* (Macmillan, 1994)、David Worrall 共編 *Blake in the 90s* (St. Martin's, 1999)、David Worrall 共編 *Blake, Nation and Empire* (Palgrave Macmillan, 2006)、Jason Whittaker 共著 *Blake, Modernity and Popular Culture* (Palgrave Macmillan, 2007)、Tristanne Connolly、Jason Whittaker 共著 *Blake 2.0: William Blake in Twentieth-Century Art, Music and Culture* (Palgrave Macmillan, 2012) 等がある。

鈴木雅之共編 *Blake in the Orient* (Continuum, 2006) を出版した後は、ロマン主義を取り巻くより大きな文脈をめぐる問題へと関心がシフトし、最近では特定の国境に捉われることなく、国際社会における伝達・受容の問題も含めて、ロマン主義を越境的な思想・運動として捉え直すことを目指している。こうした関心の広がりには Tristanne Connolly 共編 *British Romanticism in European Perspective: Into the Eurozone* (Palgrave Macmillan, 2015) をはじめとする研究業績に反映されているが、同時により最近では、特にアジアにおけるロマン主義をめぐる問題に着目している。これらの問題は、筆者が長年にわたって興味を抱いてきたポストコロニアル文学理論や、文化横断的・超歴史的な邂逅をめぐる解釈学への関心とも強く結びついている。主要な業績としては、筆者が単独で編集・執筆した *Travel-Writing and Empire* (St Martin's, 1999)、Paul Ricoeur (Routledge, 1990) 等が挙げられる。その他、ジェンダー理論(*Sordid Images: the Poetry of Masculine Desire* (Routledge, 1994))、英米文学の相互影響関係( Mark Ford 共著、*Something We Have that They Don't: Anglo-American Poetic Relations since 1925* (University of Iowa Press, 2004))、文学と科学の関係性などにも関心がある (Tristanne Connolly 共著 *Liberating Medicine, 1720-1831* (Routledge, 2009))。

## 2. 研究の目的

本研究の主眼は、ロマン主義の受容史、歴史区分の問題、アジアにおけるロマン主義の受容の歴史を、西洋の思想・文化運動の二次的な産物としてではなく、それ自体としてどう定義すべきかを問うことにある。これは同時により大きな問題—東洋と西洋の政治的・経済的・イデオロギー的な関係性—と繋がるだけでなく、近年注目が集まっている多元的価値に基づいた世界史の構築をめぐる試みとも結びついている。

本研究は Andre Frank, *ReORIENT: Global Economy in the Asian Age* (1998) の議論に着想を得ている。Frank は本書の中で、ヨーロッパの台頭は、アジアが常に支配的な地位を独占してきた世界秩序という文脈で見れば、ほんの短いインターラード(間奏曲)に過ぎないと主張している。この文脈において、いわゆるロマン主義時代という伝統的な時代区分のあり方が極めて恣意的なものであったことは強調されるべきである。仮に1789年のバスティーユ襲撃をロマン主義時代の起点とするのであれば、なぜ我々はルイ16世の処刑ではなく、この事件をフランス史における転換点とみなすのか。もし選挙法が改正された1832年をロマン主義時代の終わりとしてみなすのであれば、なぜ我々はヴィクトリア女王が戴冠した1837年ではなく、イギリスの法制史に関わる年をあえて選ぶのか。イギリス帝国主義の文脈においては、むしろイギリスがその後一世紀にわたって、世界規模の商業ネットワークを支配する海洋国家として台頭する1815年こそ、時代区分にとって重要な年であるはずなのである。だとすれば、もしアジアを時代区分を決定するマーカーとして位置づけ、ジョージ・マカートニー率いるイギリス最初の中国使節が派遣された1793年から、アヘン戦争(1839~42年、1856~60年)あるいは1853年の日本の開国や1857年のインド大反乱までを一つの時代区分とみなすのであれば、この時代はどう違って見えてくるのだろうか。

本研究は帝国による植民地支配の拡大というヨーロッパに軸足を置いたモデルに挑戦すると同時に、時間の連続性を前提とした従来の年代記のあり方を見直すことも目的としている。もしロマン主義をアジア的観点、特に受容史に着目した形で捉え直すことができれば、これは従来受け入れられてきた歴史の流れに時間のズレを生み出す(例えば日本で明治時代に入るまで、中国では1919年の五四運動まで、西洋文化・思想の受容が大きな影響を及ぼすことはなかった)。同時に線的な歴史観には、後に起こった出来事を、それ以前に起きた出来事の二次的産物、派生物、あるいはそれに劣るものとみなすことで、それ自体として評価されるべき遺産を、西洋から強要されたもの、あるいは隠ぺいされたイデオロギー支配の産物として見過ごしてしまうくらいがある。文化のトランスレーション(言語レベルでの翻訳、あるいは個人間で行われる伝達行為)の過程を語るオルタナティブな歴史叙述のあり方を模索し、こうした受容史のさらなる可能性を明らかにしたいと考えている。例えばアジアにおいては、ロマン主義の解放的あるいはユートピア的とするイメージがなお健在で、これは後の文化的発展とも一緒に吸収される形で、反体制的というよりかは、むしろ生産的な文化的アイデンティティを作り上げている。ヴィクトリア朝からモダニズム、モダニズムが

らポストモダニズムへという従来の連続的な時間区分のあり方は、異質なもの同士が結びついて何かを生み出す、そうした交わりの点をいくつも内包するより包括的なポスト・ロマン主義の概念によって、置換されるかもしれない。

### 3. 研究の方法

ポストコロナル理論の前提となっている、中心による周縁の支配という構造の見直しを通じて、世界史を循環・相互作用・相互変容の過程として、より肯定的なモデルで捉え直すことを基本姿勢としている。

近年の翻訳理論は、等価性あるいは絶対的な一致といったモデルを脱している。そのような透明性は理想でこそあれ、実際の言語の多様性とは両立しえないからである。こうした観点では、翻訳された言語は、オリジナルから遠ざかったものとなり、必然的に情報の減損といったものを示唆してしまう。本研究のオルタナティブな観点では、翻訳によって失われるものよりも、得られるもの、つまり、他なるものへ開かれ、地平を拡げ、異質なものを調停する機会を強調していく。こうして示されるのは、けっして完了することのない試練である。というのも、つねに再翻訳の可能性が存在しているからだ。しかし、その作業の徹底によって、新しい意味が産出される機会が与えられなければならない。文化の伝播は必然的に従属的・強制的な関係をはらむと想定するのではなく、本研究は、言語上の歓待・同一化・更新といったものによって定義されるのである。

### 4. 研究成果

2014年6月13日から15日に東京大学本郷キャンパスで開催された国際学会 *Romantic Connections* では世界中から研究者が集まり、100以上の学会発表が行われた。イギリス・ロマン派学会(日本)、North America Association of Romantic Studies(北米)、British Association for Romantic Studies(イギリス)、German Society of English Romanticism(ドイツ)、Romantic Studies Association of Australasia(オーストララシア)の五つの主要な学術団体による初の共同事業として、本学会は今後の国際学会の有益なモデルとなるだろう。また本学会で得られた成果をもとに、Alex Watson and Nahoko Miyamoto Alvey (eds.), *Poetica*, vol. 82が2015年に特別号として出版されたほか、Alex Watson and Laurence Williams (eds.), *British Romanticism in an Asian Context* が来年刊行予定である(最終章は筆者による)。日本と東南アジアへの注目は、2015年6月26日~27日に開催された *Isabella Bird and the Poetics of Female Travel-Writing* (東京大学本郷キャンパス)、2017年11月24日~25日開催予定の *Pacific Gateways* へと引き継がれている。当初の目的は見事に果

たされ、今後さらなる研究成果と、日本と国際社会の関係性をテーマとするプロジェクトを生み出すだろう。また一連の学会・シンポジウムで得られた研究活動のネットワークを生かして、Palgrave社と現在交渉中の「アジアにおけるロマン派」をテーマとしたシリーズの刊行についても、ぜひ実現したいと考えている。

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

Steve Clark, Laurence Williams, 'Isabella Bird, Victorian Globalism, and *Unbeaten Tracks in Japan* (1880)', *Studies in Travel Writing*, 査読有, vol. 18, no. 2 (2017), pp. 1-16. DOI: <http://dx.doi.org/10.1080/13645145.2017.1301793>

Steve Clark, "Something's Lost but Something's Gained": Joni Mitchell and Postcolonial Lyric', *'Get away from me': Canadian Popular Music on American Culture*, co-edited by Tristanne Connolly and Tomoyuki Iino (Palgrave, 2017), 印刷中。

Steve Clark, 'A City without a Nation: Personal and Collective Memory in the Fiction of Gopal Baratham', in *Singapore Literature and Culture: Current Directions in Local and Global Contexts*, co-edited by Angelia Poone and Angus Whitehead (Palgrave, 2017), 印刷中。

Steve Clark, "A Study rather than a Rapture": Isabella Bird on Japan', *New Directions in Travel Writing Studies*, co-edited by Julia Kuehn and Paul Smethurst (Palgrave, 2015), pp. 17-34.

Steve Clark, "Amphibious Grown": Hester Thrale, Della Crusca and the Italian Origins of British Romanticism', *British Romanticism in European Perspective: Into the Eurozone*, co-edited by Steve Clark and Tristanne Connolly (Palgrave, 2015), pp. 89-112.

Steve Clark, Masashi Suzuki, 'Basic English Revisited: I. A. Richards's Legacy in the Japanese English Language Classroom', *Lit Matters*, 査読有, issue 1, 2014, <http://www.liberlit.com/litmatters/basic-english-revisited-i-a-richardss-legacy-in-the-japanese-english-language-classroom/>

[学会発表](計9件)

Stephen Clark, 'Does Romanticism Have a Future?', a special lecture at an alumni meeting of NWU English graduates (奈良女子大学(奈良県奈良市))、2016年11月23日【招待講演】。

Stephen Clark, 'Re-Orienting

Romanticism', *Romantic Legacies*, The 13<sup>th</sup> Wenshan International Conference (National Chengchi University, Taiwan), 台北市 (台湾) 2016年11月18日。

Stephen Hedley Clark, 'Overcoming Cultural Difference: Jane Austen's *Pride and Prejudice*', 日本オースティン協会、第7回大会 (関西大学千里山キャンパス (大阪府吹田市)) 2016年6月29日。

Stephen Clark, 'Romanticism in Asia', a special lecture for Nihon University English Literary Society (日本大学 (東京都世田谷区)) 2016年6月18日。

Steve Clark, 'Re-Orienting Romanticism: the Impact of Revised Periodisation on Contemporary Literary Study', *Liberlit 7* (東京女子大学 (東京都杉並区)) 2016年2月22日。

Steve Clark, 'How does Romanticism translate? Ossian and the Forging of National Identity', *Re-Reading Romanticism: Imagination, Emotion, Nature and Things* (University of Melbourne, メルボルン (オーストラリア)) 2015年7月23日。

Steve Clark, 'Women Who Rode Away: Isabella Bird's *Unbeaten Tracks in Japan* and Robyn Davidson's *Tracks*', *Isabella Bird and the Poetics of Female Travel-Writing* (東京大学本郷キャンパス (東京都文京区)) 2015年6月27日。

Steve Clark, 「開会の辞」「閉会の辞」, *Romantic Connections* (東京大学本郷キャンパス (東京都文京区)) 2014年6月13日~15日【主催者】。

Steve Clark, "'The Gaudy Dream of Empire": European Dimensions of British Romanticism', イギリス・ロマン派学会、第39回大会 (安田女子大学 (広島県広島市)) 2013年10月20日【招待講演】。

〔図書〕(計2件)

Steve Clark, Tristanne Connolly (eds.), *British Romanticism in European Perspective: Into the Eurozone* (Palgrave 2015), pp. 286.

Steve Clark, Laurence Williams (eds.), *Studies in Travel Writing*, vol. 18, no. 2 (2017), special issue on Isabella Bird. 印刷中。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

S. H. Clark (Clark, Stephen Hedley)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・  
客員教授  
研究者番号：40335469